

ユスト高山右近の生涯と信仰

92

「殉教を覚悟する右近」

石田三成によって殉教者名簿から外されたことを知らない、ユスト高山右近でした。右近は、殉教にあこがれを抱いていました。

右近は直ちに馬にまたがり、主君である前田筑前守利家のもとへ、別れを告げるために走り出しました。

右近は貴重な茶入れを二つ携えていました。そして前田利家と二人だけで話しました。「それがしは、師であるオルガンチノ神父とともに、死に従う決意をいたしましたゆえ、お別れのあいさつに参上仕りました」と右近は述べて、二つの茶入れを差し出し、「わが亡き後、お好きなようにご処分くださいませように」と言いました。

利家は、「そちの立派な覚悟と、その勇気ある意思の堅固なことには、感服いたします。しかし、太閤殿下のお怒りは、フィリピンから我が国に来た者どもに向け

られたものであり、そちがマニラの修道会士を特に保護したのであれば、恐れることはなからう」と答えました。右近は、「それがしは、彼らの教えがイエズス会と同じか確かめるために、何度かマニラ修道士の家を訪問しました。教えは全く同じでございます。両修道会を区別されるのは、好ましいと思われませんか」と答えました。

それに対して利家は、「太閤殿下は、イエズス会のパアデレたちに対して、これを行おうとしているのではない、とはつきり申された」と言いました。右近は「イエズス会のパアデレたちが対象になっていないことに満足し別れを告げました。利家は右近を玄関の広間に見送り、居合わせた多数の家臣の前で、右近をたたえました。「そちたちの前にいる高山右近殿は、勇敢で傑出した人物じゃ。教養

もあり、賢明でもある。もし右近が太閤殿のご寵愛を受けるなら、日本一、二の大名になるであろう。だが、右近はキリシタン信仰を捨てぬために、現在の境遇にあるのじゃ。予は右近のために太閤殿下にとりなそうと、決意いたしました。右近は殿下のもとでキリシタンであることを認可され、イエズス会のパアデレたちを以前と同じように保護するのだと、告げなくてはならぬ」。

キリシタンの宿敵、施薬院全宗は、何とかしてキリシタンを陥れようと、秀吉にいろいろ働きかけました。秀吉は心を動かされたか、利家に「右近はまた教えを説いているか」と尋ねました。利家は「いや、彼は教えを説かない。予は多くの任務を与え、彼は多忙である」と答えました。利家らの取り成しによって、右近は殉教を免れたのです。

「カテキズムの学び」

第24回 新型コロナウイルスとカテキズム(その4)

ご存じのように昨年の自殺者数は11年ぶりに増加に転じ、中でも女性と若者の数が増えています。原因は特定できないものの、新型コロナウイルス禍の影響とも言われており、今年の自殺者のさらなる増加が懸念されているところです。

自ら命を絶たれた方々は、(個々の事情は千差万別なのは言うまでもありませんが)未来に対して絶望しが抱き得ない、希望が見いだせない状況に追い込まれてしまったのだと言えるでしょう。希望と絶望の違いはどこにあるのかについて、山本芳久教授(東京大学大学院)は『世界は善に満ちているートマス・アクィナス哲学講義』の中で、聖トマス・アクィナスの『神学大全』を元に、希望と絶望の差とは、「獲得困難だけれども獲得可能な未来の善」と「獲得困難で獲得不可能な未来の善」である、と説明しています。確かに、以前のような生活に戻ることは不可能だと考えざるを得なくなってしまうと絶望に陥ってしまうかもしれません。

一方、カテキズムは希望と絶望についてこう定義しています。

わたしたちは、『魂にとって頼りになる、安定したいかりのようなもの』である希望をたずさえて、『イエスがわたしたちのために先駆者として入って行かれた』(ヘブライ6・19~20)ところまで歩いていくのです(1820番)。

絶望とは、人間が自分の救いや、それを得るための助け、あるいは自分の罪のゆるしを神からいただけると期待するのをやめてしまうことです(2091番)。

「獲得不可能な未来の善」とらわれることなく、その先にある「獲得可能な未来の善」に視線を上げるならば、また神のいつくしみへの信頼があるならば、希望を持ち続けることができるはず。そこにすでに到達したキリスト、聖人たちが、先人たちがいることを私たちは知っているからです。

私たち信者が希望を保ちつつ生きる姿を、周囲の人たちにも何とかして伝えていきたいものです。(文 酒井俊弘補佐司教)

訃報

ジャン・ティジュ神父(パリ外国宣教会)は、4月15日、フランス本部の老人ホームで老衰のため87歳。フランス出身。



トリック労働者運動(AC O)、カトリック青年労働者連盟(JOC)の活動を通じて、多くの労働者や若者とともに歩む。労働問題にも積極的に関わった。08年、本国に戻る。一人ひとりのために自分のエネルギーと時間を全て注いだ、60年間の宣教活動だった。

1961年、司祭叙階。67年来日。67年、89年旧中山手、旧下山手、明石教会司牧。80、89年旧明石JO C House、89、2007年高砂働く人の家協力者。カ

Sr マリー美枝子(野津美枝子、聖母被昇天修道会)は、4月26日、ニューライフガラシアで老衰のため89歳。島根県出身。奉獻生活57年。1963年の初誓願後、



洲本・高松・丸亀・箕面の修道院で幼稚園等を務めを忠実に果たした。

「背水の陣」難民移住者

背水の陣

日本で生まれ育つこと、もたちへの在留許可を求めた「ネリさん母子裁判」は、4月に敗訴が確定しました。

裁判と聞けば「犯罪者が温情を求めている」と誤解する人がいます。が、決してそうではなく、「こどもたちの祖国だよ。母さんと一緒に暮らす権利があるよ」と言えるよう、国に求めたに過ぎなかったのです。

こもりがちになりました。2017年春、続けて母子も退去強制を迫られましたが、入管は「いったん国外退去したあと、こ

が、裁判所は「日本に生まれ長期安定して地域に馴染んでいようが、20年家族が睦まじく暮らそうが、法務大臣がダメといえればダメ。法的保護に一切値しない」とバツサリ切ったのでした。法治国家の日本で、最高裁において敗訴が確定すれば後がありません。今にも倒れそうな母親を前に私たちが



S君のビデオレターはこちら

こどもたちの父親は、2016年に既に強制送還され、当時中学1年生だった息子のS君は全ての気力を失い、家に閉じ

で再入国してもよい」と非現実的な条件を出してきました。応じられずにいると、入管はこどもたちを出頭させ「国外追

はそれでも手立てがないか必死に考えました。そしてとうとう母親に代わってS君が立ち上がり、ビデオレターで日本人に向けて語りか

(文 シナピス事務局 ビスカルド篤子)

カトリック墓地 納骨堂・納骨所 使用者募集

大阪教区の信者の方のみがお申込みいただけます。詳細は資料をお送りください。お問い合わせは 教区本部事務局 竹中まで 06-6941-9705